奈良の名所 全

特28
341

025569-000-0

特28-341

奈良の名所

水木　要太郎／編

M28
ADC-3060

特28
341

奈良の名所目次

○開化帝陵　三
○率川神社　三
○猿澤池　三
○采女社　四
○衣掛柳　四
○興福寺　四
○新の能　七
○南圓堂　八
○北圓堂　八
○金堂　八
○東金堂　九
○太鼓屋　九
○八重櫻　九
○十三鐘　一〇
○淺茅原遊園　一〇
○神鹿　一一
○御旅所　一一
○春日野　一二
○東金屋　一三
○祝戸神社　一三
○石燈籠　一三
○若到殿　一四
○白藤瀧　一四
○手水の屋　一四
○若宮　一四
○御祭　一五
○本宮社　一五
○春日神社　一五
○帝殿　一六
○直會殿　一六
○稻垣　一六
○林檎の庭　一六
○釣燈籠　一六
○還幸　一七
○ねおめ郡　一七
○七種木　一七
○水谷社　一七
○水谷川　一八
○洞の紅葉　一八
○月日の窟　一八
○鶯の瀧　一八
○蝙蝠の窟　一八
○三笠山　一九
○若草山　一九

○奈良帝都の趾　二〇
○武藏野　二三
○手向山神社　二四
○三月堂　二六
○二月堂　二六
○おたいまつ　二七
○若狹井　二七
○浴室　二八
○四月堂　二八
○鐘樓　二八
○行基堂　二八
○俊乘堂　二八
○東大寺　二九
○大佛　三〇
○金の燈籠　三二
○南大門　三二
○東南院　三二
○眞言院　三二
○戒壇堂　三二
○正倉院　三三
○轉害門　三三
○佐保川　三四
○多門山　三四
○北山十八門戸　三四
○般若寺　三四
○元明帝陵　三五
○元正帝陵　三五
○雲井坂　三五
○轟橋　三五
○氷室神社　三六
○帝國奈良博物館　三六
○極樂院　三六
○十輪院　三七
○新藥師寺　三七
○白毫寺　三八
○遍城寺　三八
○福智寺　三八
○安養院　三八
○元興寺　三八
○大安寺　三八
○聖武帝陵　三九
○興福院　三九
○不退寺　三九
○海龍王寺　三九
○法華寺　四〇
○御陵　四〇
○秋篠寺　四一
○四大寺　四一
○菅原神社　四二
○唐招提寺　四三
○藥師寺　四五

目次終

奈良の名所

人の西より來りて奈良の地に近づくもの先東に向はゝ、綠樹打茂りて神々しき山の優美にして角々しからぬ草山と照り映えて景色いはむ方なきに、其の麓には幾千の人家軒を打並べたるが中に大寺高塔こゝかしこに立ちたる、更に一段の眺望を加へておのづから人を迎ふるが如きものあるを見るべし。彼の黑々と打茂れるは總稱して春日山といふ。その正面に低く立てるは「あまの原ふりさけ見れば」の歌に名高き三笠山にして、有名なる春日神社はその麓に鎭座ましますなり。左のやさしきは若草山にして「この度はぬさも取りあへず」の歌に名を知られたる手

向山はその北につらなり、奈良といへば天下の人の誰しも思ひ起す大佛殿はその前に見ゆるなり。近く五層の塔の雲に聳ゆるは興福寺にして、八角の甍のその傍に見ゆるを南圓堂となす。高圓、鉢伏の諸岳は春日山の南に延き、佐保、佐紀の山々は折れて北面に横たはる。實にこれ一幅の大畫なり。今は路を停車場におこし此の畫中に分け入りて名勝古跡を探らむ。

奈良

藤井竹外

半空湧出兩浮圖。更有伽藍俯九衢。十二帝陵低不見。黒風白雨滿南都。

停車場より東に上るを三條通といふ西せば暗峠を越えて大坂に至るべし鐵道の此の地に通せしより今は道の幅も五間に打廣げられて市中最盛んなる一區となれり。停車場よりすこし東に上れば左の方に（開化天皇の御陵）を拜すべし。又少しく進みて右に入れば（率川坐大神御子神社）あり。推古天皇の朝の創立にして、媛蹈鞴五十鈴姫命、玉櫛姫命、狹井神を祭る。此國の一の宮なる大神神社の攝社なり。

開化帝陵

率川神社

猿澤池

市街の東に行き詰めたる處、右の方に一の池あり。是れ有名なる（猿澤池）にして乃の字の形をなし周圍百八十六間あり。於物ちて魚躍る。眞に古都の靈沼なり。其西北偶には世煎餅等の餌を鬻げり。投じて魚鼈の爭ひ奪ふの狀を見る亦一興な

采女社
衣掛柳
興福寺

るべし。昔奈良の朝に仕へたる采女の寵衰へたるを恨みこゝに溺れて死したるを帝嘆かせ給ひて歌よませ給ひたるよしは大和物語に記せり。池の西側にあるは（采女の社）にして、東岸にあるは采女が入水の時衣を掛けたりといふ（衣掛柳）なり。猿澤の池の月は奈良八景の一なれども佳景は獨秋にのみ限らず。春の頃は花を愛づべく、夏の夕は熱を驅るべく、冬の朝は雪を賞すべし。

（八景）長閑なる浪にぞ氷る猿澤の池より遠く月はすめども　藤原雅幸

月を手に取りはづしてやそこがもの三本たちぬ猿澤の池　讀人不知

池の北方は（興福寺）の境内なり。南方正面の石壇を上らば一の土壇を見るべし

是れ南大門の跡なり。正面に見ゆるは金堂にして興福寺の本堂なり。右の方に五重の塔あり。その北なるは東金堂なり。左の方に南圓堂あり。その北なるは北圓堂にして南なるは三重塔なり。今先當寺の略緣起を說きたる後諸堂に巡拜すべし。「當寺はもと山城の國にありて山階寺といひ、藤原鎌足が逆臣蘇我入鹿を誅伐せんが爲に作られたる丈六の釋迦を本尊とせしが、その後當國高市郡の厩阪に移されしを、和銅三年に至りて鎌足の子淡海更に此の地に移し、伽藍を造營せられしなり。法相宗にして南都七大寺の一に居り、今の縣廳、裁判所、師範學校等の地皆當寺境内四町四面の内なりしが、古來しば〳〵火災に罹りし上に維新の後に取りこぼ

れたるものありて、今は昔時の規模を見ること能はず。左に諸堂の本尊ならびに建築年度を表示すべし。

金堂	釋迦（本尊）	脇士	藥王、藥上	（建築年度） 文政二年假建	（紀元年數） 二四七九
五重塔				應永廿六年	二〇七九
東金堂	藥師	日光、月光		應永廿二年	二〇七五
南圓堂	三面八臂不空羂索觀音			寛政元年	二四四九
北圓堂	彌勒	法苑林、大明相		永承三年 應永六年	一七〇八 二〇五九

三重塔

康治二年　一八〇三

南大門の前にて以前には毎年二月に春日の神事なる（薪の能）と云ふあり。能師は金春、金剛、觀世、寶生の四座にして德川氏より能料として毎年三百石の寄附ありて頗盛んなることなりき。

地うたひの燃えしさりなる薪かな　沾德

僧脇の顔をそむけるけぶりかな　蝶夢

此の門跡の西に超然亭といふあり。門に風流三昧の額を掲ぐ。入りて一服の茶に暫く足を休めんも亦可なるべし。小野湖山翁詩あり。

薪の能

遠近峰巒秀且奇。判知風月總相宜。超然亭上快心事、難入衰翁拙劣詩。

南圓堂

（南圓堂）は藤原冬嗣が北家の衰ふるを嘆き、父内麻呂の志をつぎて建立したるものにして、西國三十三觀音の第九番に居り。八角寶形作なり。堂の前なる藤の花は奈良八景の一なり。

（八景）藤波は神のことはの花なれば八千代を掛て猶ぞ榮ねむ　二條良基

北圓堂

（北圓堂）も八角寶形作なり。本尊の彌勒は定朝の作といふ。

金堂

（金堂）には二王、四天王、法相六祖、世親、無着等有名なる佛像多し。仔細に拜觀せらるべし。金堂の後手に礎を見るは講堂の跡なり。又南圓堂の北側には西金

東金堂

堂ありしが今はその跡だに見ず。

（東金堂）にも日光、月光、梵天、帝釋、文殊、維摩、十二神將等倭れたる佛像多し。堂の前なる花の松は元錄年間に植ゑたるものにして高十四間、枝幅廿二間あり。

大湯屋

（大湯屋）は古の浴室にして大釜あり。（口徑四尺五寸、胴廻り六尺一寸、高四尺一寸、厚二寸五分）此の頃公園改良に着手しこの邊に池を穿ち樹を植ゑ節を曳くによろしき處とおれり。

八重櫻

師範學校の地にもと東園堂のありし處にして（八重櫻）の古跡あり。

植繼も鏡らじ奈良の八重櫻　古蕉

十三鐘

（菩提院）は俗に十三鐘といふ。大湯屋の西南にあり。堂は天平年間の建築にして其後大修覆を加へたれども、火災に罹りしことはなしといふ。本尊は無量壽佛にして厨子に兒觀音あり。俗に小兒鹿を殺して石子詰にあひしといふ古跡はこの處なれどもその事は妄誕なり。こゝを十三鐘といふと興福寺の僧侶の春日神社へ勤行にゆく時を報せん爲、朝の七ツ時と六ツ時との間に此處の鐘をつきしによれりその鐘今は南圓堂の傍に移されたり。

淺茅原遊園

春日大鳥居に至れば右に（淺茅原遊園）あり。南は荒池に臨みて景色、尤愛すべく

神鹿

時嵐堂、水明樹、待月庵、友鹿寮等十數の亭舍各軒を別にして、杯盤茶菓よべば立ちどころに至るべし。

春日參詣の道にて鹿の多く戯るゝを見るべし。當地のは春日の神の鹿島より遷らせ給ひし時伴はれ給ひしとて（神鹿）と稱へ古より大切になして以前には市中に犬をも飼はざりしといふ。

灌佛の日に生れあふ鹿の子かな　芭蕉

鹿をおふ獵師なければ奈良の町西も東も山を見るかな　問屋酒舟

御旅所

路の北傍に一の長藏あり。其の西方は春日若宮祭禮の時（御旅所）となりて祭式を

行ふ所なり。飛火野といへるは昔警を報ずる爲烽火を置きたる處にて此のあたりなりしならんといふ。

春日野の飛火の野守いで〻見よ今幾日ありて若菜摘みてん　古今

春日野の飛火のどもり出て見よいいくか有てわわ若菜摘ん　蜀山人

行く人のくはへ煙管の吸殻も横に飛火の野邊の春風　梅園靜廬

（春日野）とはこのあたりより若草山邊に至る迄を總稱していふなり。

（八景）春日山峯の嵐や寒からん籠の野邊に鹿ぞ啼くなる　藤原公勝

春日野にもゆる若草鹿なくひと君のきまさばあえ物にせん　古來稀世

春日野

車舍屋

祓戸神社

石燈籠

少しく進めば左に大佛の南大門を見、右に雪消澤の跡を見る。更に進みて左に宏壯なる建物を見るは倶樂部にして、二の鳥居前に一屋わるは（車舍屋）とて貴人の下乘して車を置く所なり。（祓戸神社）は路の左にありて瀬織津姫命を祭る。其の前なる燈籠は祓戸形とて名高し。これより左に入るべき壁石を劍先石といふこゝを上れば藤の鳥居を越えて本社の西脇に出づべし。

（石燈籠）は歩を進むるに隘ひて其の益多きを見るべし。その總數近頃の調査によるに一千七百八十九個あり。其の中御間形、柚形、雲卜形、西の屋形、奥の院形等皆一種の形式を存するなり。

着到殿

被戸神社より右に入れば左の方に（着到殿）あり。官祭の時勅使以下の人々見參を記し、處なり。その下より右に入れば（白藤の瀧）あり。水小なれども綠樹日影をも漏らさぬ處涼を納るゝによし。

白藤瀧

樓門を入れば本社に至る。今は先後手より若宮に至るべし。

手水の屋

（手水の屋）は若宮の南にありて大國主命、須世理比賣命を祭る。柚の燈籠はその東傍にあり。保延二年關白藤原忠通の寄附に係る。

若宮

（若宮）は天兒屋根命の御子天忍雲根命を祭る。長承四年の創立なり。當時疫病行はれ饑饉の害さへありしかば、時の關白藤原忠通若宮に祈りて祭禮を執行したるは所謂（御祭）の始めなり。大和一國の大祭禮にて德川氏の時には大名旗本等當國に領地を有する者より贄の鳥獸を獻じ、又祭儀の供奉をもなし、頗盛んなることなりき。今は十二月十七日にこの祭禮あり。私祭なれども遠近の人來集して賑はしきことといはん方なきなり。

御祭

若宮の前に神樂所あり。白衣緋袴の巫子常に神樂を奏する所なり。若宮より本宮に至る間にあるは御間形の燈籠なり。この邊に東に上るべき道あり。これを分け上らば三笠山の頂にある（本宮の社）即奥の院に至るべし。

本宮社

南門を入れば正面高き所に更に一の樓門あるを見るべし。（本社）はその内にあり

春日神社

て四社相並びて立ち給へり。第一殿は武甕槌命にして神護景雲元年常陸の鹿島より遷坐し給ひ、第二殿は經津主命にして下總の香取より、第三殿は天兒屋根命第四殿は姫大神にして共に河内の牧岡より、何れも同四年に遷坐し給へり、南門に近く建てるは（幣殿）にして舞殿と棟を同じうし、左方に大なるは（直會殿）にして勅使以下直會の勸盃を行ふ所なり。本社に詣るには右より上りて左に下る。廻廊内諸建築の配置結構その變化多くして神韻に富めるを見るべし。

幣殿
直會殿

本殿の前に立てる垣を（稻垣）といふ。田植の神事に稻を掛く。幣殿の前なる庭を（林檎の庭）といふ。祭儀を行ふ處なり。本社には（釣燈籠）亦多し。金燈籠すべて

稻垣
林檎の庭
釣燈籠

九百八十八個あり。鳴蟬（直會殿の東南隅に釣れり）神前形、鬼形（共に本社の前にあり）等有名なり。木燈籠は二十六個南門に釣れり。又瑠璃の燈籠とて有名なるものあり。

遷殿
ねぢり廊
七種木
水谷社

本殿の西傍に（遷殿）あり本社建築の砌神をこゝに遷し奉るなり。本殿と遷殿との間にかゝれるを（ねぢり廊）といふ左甚五郎の作なりといへり。其の傍に（七種木）あり。柞に藤、椿、南天、櫻等寄生せるを。今は黄葉陸英の二種枯れたり。」廻廊を出でゝ北にゆかば（水谷社）に至るべし。素盞男命、奇稻田姫命、大巳貴命を祭る。俗に縁結びの神なりと稱へて神前に多く紙を結べり。此の北に流るゝを

水谷川
洞の紅葉
月日の窟
鶯の瀧
蝙蝠の窟

（水谷川）といふ。下流は東大寺南大門の前を流れて吉機川となり佐保川に入る。（洞の紅葉）（月日の窟）（鶯の瀑布）（蝙蝠の窟）等は皆此の川上にあり。月日の窟は氷室の跡にして、蝙蝠の窟は昔春日砥を採掘せし跡ならんといふ。暇あらん人は探りてその幽勝を愛せらるべし。

水谷社の近邊の茶店に火打燒といふ餅を賣げり。妹背山の淨瑠璃に「賃には春日野の火打燒」といふことあるより、看板に「ちんには」の字を書き加へたるは謂はれなし。味は一般名物の味なりや否や。試みて判斷せらるべし。

水谷川を渡りて石壇を上れば芝山の麓に出づ。芝山乙即若草山にして東南に近く

三笠山

見ゆるは即春日神社の鎮座ましませる（三笠山）なり。

（八景）三笠山さしてたのめば白雪の深き心を神や知るらん　西園寺實俊

春風や人聲うつる三笠山　芭蕉

若草山

（若草山）はつゝらをりともいふ。俗には誤りてこれを三笠山なりといへり。一面の芝草毬を敷けるが如く。これを上れば所謂一歩々高うして光景開く處、前には生駒、信貴、二上、金剛の諸山を見るべく、左の方には低く畝火、耳無、香久の三山をも望むべし。上るに隨ひて大和南部の諸嶺、山城北部の諸岳、亦皆指顧の間にありて、景色の美、心意の快、實に言ふべからざるものあり。山下を過ぐる

人必登覽を試みらるべし。今は此の佳景に對する序をもて奈良舊都の事を說くべし。

奈良舊都の趾

奈良の西方一面の平野は實に(奈良舊都の趾)なり。彼の停車場の傍を東西に通せる三條通は卽舊都の三條通にして、其の北手に當りて一條の道路市街を出でゝ一直線に田畝の間に通せるものは一條通なり。一條通の突き當れる處り一村落を法華寺といふ。その西方は卽平城宮のありし處にして、今に大黑芝の名を存ずる處は大極殿の跡ならんといふ。三條通の突き當れる處を尼ケ辻といふ。その北の方には西大寺あり。もと一條通の西に聽きたる處なり。その南の方には唐招提寺あり五條に當り、藥師寺あり六條に當る。しかして九條と今の郡山の市街にかゝれり。故に羅城門の跡なるべしと思はるゝライセ墓といふ地は郡山の停車場の近傍にあるなり。元明天皇か都を此の地に移し給ひしより、七朝七十餘年の間は世に類なき大都會となりて益繁盛に趣きけんを、一たび桓武天皇の都を京都に移し給ひしより、市街の地は忽に田畝と變じて、九重の都の跡も人の知るもの稀なるに至れり。俯仰今昔の感に堪へざるなり。

あをによし奈良の都の黑木もて作れる宿はをれどあかぬかも　聖武天皇

青丹よし奈良の都は咲く花のにほふが如く今さかりなり　小野老

故郷となりにし奈良の都にも色はかはらず花は咲きけり　奈良御門

故郷の奈良の都をきて見れば鹿のふしどゝあれにけるかな　正主

世の中を常なきものと今ぞ知る奈良の都のうつろふ見れば　讀人不知

いにしへの奈良の都の牡丹かな　其角

奈良に寐る夜やあちこちに霜の鐘　升六

今は只鹿の臥床や都跡　古蕉

頼母しき伽藍の寂や奈良の春　古蕉

奈良宿ニ中沼氏ニ　大典

遶レ城多是梵王家。無ニ復春風駐ニ翠華一。夜半鐘聲孤枕下。猶思長樂舊時花。　大内承裕

南都ノ覧古

百二皇居駐ニ五雲一。千秋氣象正氤氳。衰衣何改龍鱗色。寶字長存龜背文。
一自三彗星凌ニ北斗一。漸看階草弄ニ南薰一。誰知神器終遷去。長使ニ空林鹿作ニ群。

若草山の麓あたりを(武蔵野)といふ。伊勢物語に

武蔵野を今日はな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり

若草のたけののびては武蔵野にけふは小袖のつまも籠れり　菅原長根

この近邊には鹿の角細工、刀剣、筆墨、團扇、奈良人形、春日盆、根來塗、奈良

漬、霰酒等を賣れる店軒を並べて頻に客を引けり

奈良團扇もとの都の風ぞ吹く　袁立

元直にも奈良の物とて澁々に手をうちは賣捗ぐ商ひ　雲樂齋

奈良漬は奈良に限らず何處でもかすがあるから奈良漬といふ　鵜柄仙口

手向山神社

若草山を北に入れば縣社（手向山神社）あり。天平勝寶元年東大寺の鎮守として宇佐八幡を勸請したるものにして、應神天皇、比賣大神、仲哀天皇、神功皇后の四神を祭る。社の位置は屢かはりしが建長二年北條時頼の命によりて今の處に移し奉りぬ。社殿は元祿年間の造營ぞ。殿上にある狛犬は名作にして雲慶の銘あり。」

手向山神社の前を下れば大佛殿に至るべし。今は先北に出でゝ三月堂に詣らん。三月堂の西にあるを三昧堂とし、北にあるを二月堂とす。三昧堂の北隣に開山堂あり。其の下の方に念佛堂鐘樓等あり。今先重なる堂宇の創立並に建築年度を表示すべし。

	創立年度	紀元年數	建築年度	紀元年數
三月堂	天平五年	一三九三	天平五年（營繕三回）	
二月堂	天平勝寶四年	一四一二	寛文九年	二三二九
三昧堂	治安元年	一六八一	治安元年（天和二年營繕）	

鐘楼　天平年間

大佛殿　天平勝寶三年　一四一一　寶永五年　二三六八

南大門　天平勝寶四年　一四一二　天平勝寶四年（正治元年建替）

三月堂

（三月堂）は法華堂とも金鐘寺ともいふ。天平五年聖武帝の勅命によりて良辨僧正の開基したるものにして、東大寺中にて最古の建築物なり。堂内には梵天、帝釋二王、四天王、日光、月光、吉祥天、辨才天、地藏、千手觀音、彌勒、不動並びに北面の執金剛神等佛像の傑作多し

二月堂

（二月堂）は良辨僧正の弟子なる實忠和尚の開基にして本尊乙銅像の十一面觀音なり。別に秘佛の小觀音あり。その膚溫暖なりとて肉身の像といへり。水火の難を免るべしとて世人の信仰最深し。

三月一日より十四日迄の間修二會といふ法會あり。實忠和尚が天平勝寶四年に始めたるものにて、行法の僧が籠り所より本堂に至るに松明をともして明りとす。故に俗に（おたいまつ）といふ。十二日の夜には廊下の下にある（若狹井）より七荷半の閼伽を汲み取り年中の香水とす。是を若狹井といふは實忠和尚が行法の際若狹の遠敷明神閼伽を奉らんとの御告げあり、やがて黑と白との鵜岩中より飛び出し、そこより水の湧き出でしに由れり。

おたいまつ
若狹井

芭蕉　玄梅

水取やこもりの僧の沓の音
雪汁か若狭の水のつめたさよ

浴室　若狭井の下の方に（浴室）あり。天平時代の者といへる二十八石入りの大釜あり。

四月堂　開山堂には良辨僧正、實忠和尚の座像あり。（三昧堂）は俗に四月堂といふ。本尊は三尊阿彌陀如來。こゝを下れば念佛堂に至るべし。本尊は地藏菩薩。（鐘樓）は其の西にあり。（行基堂）（俊乘堂）また其の傍にあり。鐘は高さ一丈三尺六寸、口徑九尺一寸二分、厚八寸、胴廻二丈七尺あり。熟銅五万二千六百八十斤、白鑞二千三百斤を要したりといふ。

鐘樓

行基堂
俊乘堂

東大寺

（八景）れく霜の花いつくしき名も高しふりぬる寺の鐘の響に　四辻善成

（東大寺）は聖武天皇の勅願により、良辨僧正の勸進にて建立せられたるものにして、有名なる大佛は其の本尊なり。宗旨は八宗兼學なれども三論華厳を主とし、本邦の總國分寺たり、大佛は大佛師國中公麻呂の工夫により、三年の間、八度の改鑄を經て天平勝寶元年に成就し、其の三年には大佛殿の工事も亦落成したり。其の後治承四年平重衡に攻められて佛殿兵火に罹りしを後白河天皇御再興の御志あり。源頼朝を大檀那とし俊乘上人に勸進せしめて建久元年に再建成就しき。其後永祿十年三好松永戰爭の砌再兵火に罹り大佛の御首も落ちぬ。山田道安御

首を修治したりしも佛殿は久しく建立なかりしが、公慶上人勧進となりて元祿十年に普請始り寶永五年堂供養ありき。

初雪やいつ大佛の柱立　芭蕉

大佛殿は桁行三十三間、梁行三十間、棟高二十四間、柱數六十本、廻廊南表百四十四間、東西表各六十七間あり。

（大佛）は金銅の盧舎那佛坐像にして、總長五丈三尺五寸あり、其の各部の大さ左の如し。

面　長さ一丈六尺　廣さ九尺五寸　眉長さ五尺四寸五分　目長さ三尺九寸　鼻前徑二尺九寸四分

口長さ三尺七寸　耳長さ八尺五寸　肩長さ二丈八尺七寸　胸腹長さ各一丈八尺

臂長さ一丈九尺　肘より腕まで一丈五尺　左手大指四尺八寸　中指　五尺八寸

螺髮九百六十六　各高一尺　徑六寸　鑄料　熟銅　七十三万九千五百六十一斤

錬金　一万四百四十六両　白鑞　一万千六百十八斤　水銀　五万八千六百二十両

炭一万六百五十六斛　後背高さ八丈三尺　横二丈五尺　厚五尺　後背佛十六体

高八尺　乃至九尺

大佛の鼻から出たり煤はらひ

奈良大佛　稲垣　研嶽

金の燈籠

金仙東渡變ニ銅仙ニ欲レ度ニ衆生ニ高聳レ肩。輸却洛陽新巨佛。捨レ身散作三萬文錢。

大佛殿の前に(金の燈籠)あり。八角にして高さ一丈三尺あり。世に陳和卿の作なりといへど、その實は天平時代のものなるべしといふ。

南大門

大佛殿の南方に(南大門)あり。高さ十三間半。二王は東方密迹力士は湛慶、西方金剛力士は運慶の作なり、各二丈六尺五寸あり。こゝにある石の狛犬も有名なるものなり。

東南院
眞言院
戒壇堂

門の東傍に本坊(東南院)あり。大佛殿の西方には(眞言院)あり。(戒壇堂)あり。戒壇堂は日本三戒壇の一にして、天平勝寶六年唐僧鑑眞來朝の砌大佛殿の前に築きたるを、その後こゝに移したるなり。名作の四天王あり。

正倉院

大佛殿の後手に至れば(正倉院)あり。校倉にして三區に分れたれば三倉とも言ふ。孝謙天皇御父聖武天皇の御物を供養の爲に東大寺へ献納せられたるにて、古來勅封なりしが今はます〳〵嚴重に保護せらるゝことゝなれり。納むる所の服飾器具皆歴史工藝上の參考たるべき貴重の物なるを、建築以來今に千百餘年一たびも天災にあゝざるは實に國家の幸福といふべし。

轉害門

正倉院の後を西に出づれば(轉害門)に至る。俗に大門とも景清門ともいふ。天平年間の建築なり。景清がこの處にて頼朝を狙ひしといふは俗説なり。これより西する街道は即古の一條通なり。こゝより北に向へば京都街道なり。二三町に

佐保川

して（佐保川）を渡るべし。其の螢は八景の一なり。

（八景）とぶ螢影をうつして佐保川の淺瀬に深き心をぞ知る　三條公忠

多門山

この左の方に（多門山）あり。かつて松永久秀の城を築きし處なり。路の右傍に（

北山十八門戸

北山十八間戸）あり。昔忍性といふ僧の病人乞食等を浴せしめたる處なり。猶

般若寺

進めば（般若寺）に至るべし。舒明天皇の時の創立にて聖武天皇の朝に伽藍となりしものにして本尊は文殊菩薩なり。堂宇は屢火災に罹りしが觀音堂と樓門とは幸に當時建築のまゝに殘れり。十三重の石塔婆は高さ五丈あり。聖武天皇の御建立にして地底には宸筆の紺紙金泥の大般若經を埋め給へりといふ。大塔宮の難を大

般若經の唐櫃の内に避け給へりといふは即この寺にして、今もその唐櫃なりとい

へるが殘れり。

元明帝陵　元正帝陵

この北西の方に（元明元正二帝の陵）あり。今は立ち返りて再び佐保川を渡り大

雲井坂

門の前を過ぎて猶南に進めば一の小坂を上るべし。これ（雲井坂）にして坂の上に

轟橋

（轟橋）の古跡あり。雲井阪の雨は轟橋の行人と共に八景の一なり。

（八景）村雨の晴間に越えよ雲井坂みかさの山は程近くとも　爲重

（八景）打わたる人めもたえず行駒のふみてぞならせ轟の橋　小倉實遠

師範學校の東角に當りて中村直三翁の碑あり。翁は當國山邊郡の人にて農事に熱

心にして至尊に拜謁するの榮譽を得たり。委しくは碑文に就きて知るべし。こゝより少しく東に入れば（氷室神社）あり。祭神は仁德天皇、額田大中彦皇子、鬪雞稻置。

氷室神社

帝國奈良博物館

（帝國奈良博物館）は明治廿五年六月工事に着手し二年半にして落成し、建築費凡十万圓を要したり。本館は京都博物館と共に十分震害を防ぐべき構造なれば、その堅牢なること他に類なしといふ。本館東西二十間餘、南北三十間餘、尤廣き中央館と幅五丈長七丈八尺、天井高三丈二尺あり。

極樂院

今は更に極樂院、十輪院、新藥師寺等に至るべし。（極樂院）は元興寺の子院にして中院にあり。本堂は養老年間の建築にして、本尊は春日の作といへる阿彌陀如來なり。智光の書ける板曼陀羅、百濟の職工が元興寺の塔を作らんとて試みに作れる堵あり。

十輪院

（十輪院）と眞言宗にて其の開基は聖寶とも空海ともいふ。禮堂は元明天皇の宮殿の一部を賜はりしものといふ。構造の異なる處あるを見るべし。本尊は地藏菩薩にて石窟中に刻めり。こゝに又朝野魚養の墳あり。

新藥師寺

（新藥師寺）は高畠にあり。創立の本願と聖武天皇なりとも光明皇后ともいふ。本尊と行基の作といへる藥師如來にして、脇士日光、月光と桑度利の作なり。

白毫寺
廻城寺
福智寺
安養院
元興寺
大安寺

又十二神將も桑度利の作にして有名なる塑像なり。

（白毫寺）はこの東南の山の上にあり。天智天皇の本願にて勒操僧都の開基したるものなり。こゝに小野篁作の地藏、菅原道眞作の閻魔あり。

此の他紀寺の（蓮城寺）清水の（福智院）北袋の（安養寺）は皆千年以前の建築なり。

昔は鬼すみたりとて、顏をしかめて「がでじ」といへば子をも威し得たりしといふ。

（元興寺）は、類稀なる大伽藍なりしが、今は大方町家に變して僅に小堂を殘し、東西兩大寺に對して南大寺ともいへりし（大安寺）も、久しく其の礎にのみ名殘を留めしが今は小堂を建てゝ其の趾をしめせり。

聖武帝陵
興福院
不退寺
海龍王寺

奈良の市内大方を見廻りぬ。今一日を費して奈良の西郊をめぐるべし。唯町の西北の方なる法蓮に至りて彼の一條通に出づれば、北に（聖武天皇）（仁正皇后）の御陵）を拜すべし。仁正皇后は聖武天皇の皇后にして光明皇后とも申し奉る。

其の前に流るゝは佐保川なり。これより少し西にゆけば山添ひの處に（興福院）あり。尼院にして本尊は阿彌陀如來。寛文五年添下郡菅原、伏見の里より移し建てられたるなり。これより西の方に當りて不退寺あり。（不退寺）は平城天皇御讓位の後居給ひし殿なりしを、承和十四年御孫在原業平寺院に改め自作の觀音を安置したるなりといふ。不退寺の西に海龍王寺あり。（海龍王寺）は一に角寺ともいふ

光明皇后の本願にて天平三年に創立せられたるなり。本堂などは當時建築のまゝに殘れり。

法華寺

（法華寺）は海龍王寺の西に隣れり。もと藤原不比等の屋敷地なりしを、光明皇后の本願にて伽藍を建立し給ひ、國分尼寺としなし給へるなり。されば當時は頗盛んなる事なりしが屢衰頽に傾きしを、慶長六年に至り豐臣氏片桐且元に命ぜて興復せしめたり。今の本堂は舊金堂の殘木を以て建てたるなり。本尊はもと秘佛なりし十一面觀音にして名作なり。

御陵

この西の方に彼の大黒芝あり。この北の方に仁德天皇の皇后なる磐之媛の御陵あり。佐紀に平城天皇の御陵あり。山陵に垂仁天皇の皇后なる日葉酢姫、孝謙天皇成務天皇神功皇后等の御陵あり。これ等の御陵を拜して秋篠寺に至るべし。

秋篠寺

（秋篠寺）は寶龜十一年善珠僧正の光仁、桓武兩帝の本願によりて開基したるゝ。本尊の藥師は行基の作といふ。この他にも名作の佛像あり。古は規模宏大なりしが保延元年兵火にかゝりて大に衰へぬ。

秋篠の雪ほの白し鹿の鈴

秋篠や矧山の里や時雨るらん生駒の岳に雲のかゝれる　西行法師

西大寺

（西大寺）は秋篠寺の南の方にあり。孝謙天皇の勅願にて天平神護元年に建立した

るものにして開基は常腐なり。始め頗宏大なりしが屢火災に罹りて昔時の建築物を存せず。本堂の本尊は釋迦如來なり。觀音堂には鳥羽天皇の勅願によりて作りたる丈六の十一面觀音を安置す。又こゝに孝謙天皇の鑄造せさせ給ひし金銅四天王の像あり。この他愛染堂に愛染明王あり。護摩堂ゐ不動あり。猶名作の佛像少からず。

菅原神社

さりともと西の大寺頼むかなそなたの願とゞもしかからしを　般富門院

西大寺の南の方を菅原の里といふ。菅公の祖先の住み給ひし處にして（菅原神社）あり。其の傍なる喜光寺は又菅原寺といひ行基の創立せし處なり。其後行基はこの寺に死したりといふ。この近傍に垂仁天皇の御陵あり。その西の方に安康天皇の御陵あり。

唐招提寺

（唐招提寺）は垂仁帝陵の南方五條にあり。天平勝寶八年聖武孝謙両帝の勅願により唐僧鑑眞の開基したるものなり。律宗にして一時西大寺衰頽せし後七大寺の一に數へられたり。南の門を入れば正面に立てるは金堂にして唐の思託の作といへる乾漆の盧舎那佛を安置す。其の後に講堂あり。平城宮城内の朝集殿を遷し建てたるものにて鑑眞の戒律を講じたる處といへり。本尊彌勒は唐の軍法力の作といふ。この二堂には名作の佛像多し。其の東方に立てる長さ堂は北の方に舎利殿

といひ佛舍利三千粒を本尊とし、南の方を禮堂といひ毘首羯磨の作といへる赤栴檀の釋迦の像を本尊とす。この他の諸堂にも昔時建築のまゝに殘れるもの多く、佛像什器にも優れたるもの少からず。

		建築年度	紀元年數
金堂、	皷樓、	天平勝寶八年	一四一六
講堂、	舍利殿、	禮堂、 天平寶字三年	一四一九
經藏、	寶藏、	弘仁二年	一四七一

唐招提寺に鑑眞和上の御影を拜し御眼のしひさせ給ふをれもひつゝけて

若葉して御目の雫ぬぐはばや　芭蕉

招提寺の南の方に(藥師寺)あり。法相宗なり。天武天皇八年皇后御不豫なりしかば祈りの爲に御創立ありたるものにて、もと高市郡にありしを元明帝の養老二年こゝに移されたるなり。南の正面に建てるは金堂にして延寶二年に再建したるものなり。本尊の金銅藥師如來、脇士日光月光と天武天皇白鳳九年に鑄させ給へるものといふ。其の佛壇は大理石にて長さ六間、幅二間、高一尺八寸あり。養老年間百濟國王の貢獻したるものなり。其の北の方に講堂あり。文化二年の再建にて本尊は金銅の藥師なり。東塔は聖武天皇の勅願にて天平二年に建立したるものに

て高さ十一丈五尺あり。其の銅柱の銘文は舍人親王の題書なりといふ。其の東に東院堂あり。養老五年長屋王の創建に係る。本尊は閻浮檀金なりといへる聖觀音なり。塔と此の堂は未火災に罹らず。門の西方に佛足堂あり。佛足跡を刻せる石あり。高二尺三寸五分、長二尺六寸五分、幅三尺四寸。其の後に高六尺餘、廣一尺五寸程の石碑建てり。歌を刻めり。有名なるものなり。

これにて西山めぐり大方はをはりぬ。路順によりては郡山を經て矢田の地藏、松尾の觀音に參拜して法隆寺にも出づべく、或はふたゝび奈良に立ち返るべし。

旅店を始め土産物の案内

旅店のよきあしきは實に旅中快樂の幾分を增減すべきものなれば諸君が一夜足を伸ばさん處をしらべ置かんも要なきにあらじされども余は諸君に對してこれを指定せん權利を有せず今もたゞ二三をならべて諸君が撰擇の參考に供すべし

若草山の麓に武藏野亭あり地高く境幽にして朝暮清爽の氣を掬すべし菊水樓（通稱菊屋）は春日大鳥居の前にあり結構宏壯にして後に荒池の好風景あり對山樓（通稱角定）は天蓋景清門の南方に在りて亦熱鬧を避くべし猿澤池邊には旅店最多し西邊に金波樓ありこれ通稱印判屋と稱するものにして其の西にある小刀屋と共に能く世人に知らる池の南西隅に見ゆるを明秀館とす古器珍品に富む枕流亭は尾

花川にのぞみ其の母宅なる魚屋は鎌屋と共に其の南に比ぶ含翠樓は洋風にして池の東南にあり三景樓(通稱足代)は池の町にありて閑屋多し此の他池の南方なる蔦屋綱屋松竹屋有り又寺内に大文字屋大松等有り天蓋の豆腐屋壺屋の如き幾十の旅店は皆室を清めて諸君の至るを待てり其の家の廣狹と價の高下との如きと車夫店婦に聞くも畧其の要領を得ん

酒をよびて旅中の勞を慰せんには右に掲ぐる旅店皆固より可に猿澤が原の遊園に杖を曳きて一浴を試みんも亦可なるべし然れども單に割烹のみを以て有名なるは城戸の松利亭なり夕陽の西山に春く處三層樓上　尤　杯　を擧ぐるによし猿澤池の東岸に澤の屋あり小西に丸屋あり遊園の傍に一柳亭あり大佛南大門外に三山亭あり歌妓を蓄ふる者には光林院に萬玉米濱坂井の三樓あり席に乙大西米種萬春あり其の他鶏肉に乙元林院に鳥梅あり牛肉には鳴川の大松西寺林の可笑亭あり鮨に餅飯殿の松の鮨西寺林の三桝亭あり蕎麥に光明院の一九西寺林の寺佐あり此の他海善　蓮　亭魚卯玉川お多福魚虎の如き或は割烹に優るゝ者或は風景に富める者輕便なる者閑靜なる者各其の特種の取るべき所ありて客を招けり

木辻は寛永年間より開けたる遊廓にして天和二年松壽軒の筆にも「案内知る人處自慢して此處こそ名にふれし木辻町北は鳴川と申しておそらく娼の風俗都にはぢ

ぬ撥音」としるせる程にて今も數多軒をならぶ中にも米濱愛三河内の三樓尤大にして京祇の如きこれに亞ぐ元林院は明治五年頃始めて酒樓に歌妓を蓄ふるものありしが其の後樓霞樓開勢樓等二三の娼戸をも見るに至れるなり

餅は春日野の火打燒と大佛の蔵餅との外に小川町に丹久餅あり笹餅にお糸餅あり天蓋に威德井餅あり築地の内におばこ餅あり市外には大安寺に燒餅あり皆品卑けれども下戸の腹をふくらすを得べし饅頭は押上に壽饅頭あり今御門に福助饅頭あり餅飯殿に達磨饅頭あり橋本に春日饅頭あり菓子は天蓋及び角振の湊屋と餅飯殿の翡屋とを推し高御門の南玉堂東向の千代の家等これに亞ぐ而して青丹吉古都の瓦大和錦奈良のつと八重櫻奈良八景等菓子の土産物にあつべきものは何れの店にも之を求むべし

奈良の名産は先墨に椿井の古梅園あり其の名最聞ゆこれにつぎて三條の大森西御門の宮武の芝新屋の隅山東向の令光堂今辻子の大滿等あり筆には餅飯殿の水谷三橋等あり根來塗は今小路の吉田尤高手を以て著れ東向の大西及び森田三條の松田等亦これを出だす多し骰酒及び奈良漬は西御門の菊屋尤名高く福智院の今西これにつぐ又李の奈良漬は大佛南大門内に森あり奈良團扇及び奈良扇は西御門の池田福島北川の製するもの最善く奈良晒春日籐等は新町の高阪元林院の白政より出づ

るもの多く奈良足袋は東向の壺屋脇戸の伊東より出で奈良人形は東向の東林西御門の松壽芝新屋の杏園若草山麓の桃源等の手に成るもの多し此の他鹿の角細工春日盆紙の鹿を始め土産物とすべきものは若草山麓三條通等至る處に容易く求むるを得べしたゝ諸君に注意すべきは多く旅人の入込む土地の通弊とて新店小舗の如きは時に無法の價を貪らんとするものなきを保すへからず又車夫案内者等にて言ふへからざる關係ありて其言ふ處善惡共に未だ必しも信ずべからずされば旅店を求めんにも買物をなさんにも能く世に知られたる處に就かんこそ安全なるべけれ

奈良の名所終

明治二十八年五月廿四日印刷
明治二十八年五月廿九日發行

正價金十錢

著者　水木要太郎
發行者　奈良縣奈良町大字橋本三十四番地　豐住幾之助
發行者　奈良縣奈良町大字東向南拾九番地　中澤勇次郎
印刷者　大阪市東區和泉町二丁目八番屋敷　前野活版所　前野茂久次

版權所有

奈良の名所